

2022年8月27日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

詩編 85 : 9~14

ルカによる福音書 24 : 28~43

「平和があるように」

<エマオの二人の弟子>

旧約聖書には、神さまがすべての人を罪から救ってくださるご計画のことが、預言者を通して語られています。旧約聖書に語られていたこととは、メシア、救い主が遣わされるということ。そして、そのメシアは、苦しみを受けてから、栄光に入る、ということです。

この、神さまの救いのご計画を実現して下さったのが、神の御子でありながら、まことの人としてこの世に来て下さった、イエスさまでした。

イエスさまは、メシア、救い主として世に来られました。そして、十字架の苦しみを受け、死なれました。メシアは苦しみを受ける。それは、神さまに背き、逆らい、滅びへと向かっているわたしたちの代わりに、わたしたちのすべての罪を背負い、わたしたちが受けるべき神の裁きをすべて引き受け、わたしたちの身代わりとなって下さるためです。だからこそ、わたしたちを罪から救うメシアは、苦しみを受けなければならなかったのです。

そして、約束の通り、メシアは苦しみを受けて、栄光に入られます。イエスさまは、十字架の死から三日目に、死者の中から復活なさいました。これは、わたしたちの罪の贖いが成し遂げられたということであり、神さまの救いのご計画が実現したということであり、神の力が、死の力を打ち破ったということなのです。

この、十字架の死から復活なさいましたイエスさまが、弟子たちに現れて下さった。この数週間は、そのような箇所のお言葉を聞いています。

24 : 13~32 までは、エルサレムからエマオの村へ向かっていた二人の弟子に起きた出来事が語られていました。二人の弟子が、イエスさまの十字架の死に絶望して、暗い顔をしてエルサレムを離れていたその道中、いつの間にか一緒に歩く、一人の道連れがおりました。実はその方こそ、復活のイエスさまだったのです。

二人は、その人がイエスさまであるとまったく気付きません。しかしイエスさまは、二人の弟子に語りかけ、話しに耳を傾け、そして、聖書にはメシアは苦しみを受け、栄光に入ると書かれており、それはまさにご自分のことであると、説き明かして下さったのです。

二人の弟子はそれでもまだ気づきませんが、だんだん心が燃えて来ました。そして、イエスさまを無理に引き止めて、一緒に宿に泊まってもらうことにしたのです。

そこで、イエスさまが食事の席に着いた時、イエスさまはそこで食卓の主人として、パン

をとり、賛美の祈りを唱え、パンを裂いて二人に渡して下さいました。

ここでやっと、二人は目が開かれて、目の前のお方が、これまでずっと自分たちが従ってきた、あのイエスさまであること。あの、十字架につけられ死んでしまったイエスさまが、復活し、今自分たちの目の前に、共におられるのだ、ということが分かったのです。

聖書の御言葉の説き明かしと、イエスさまが主人として招いて下さる食卓。それは、今のわたしたちの教会における、聖書の御言葉の説教と、聖餐の食卓と言えるでしょう。

ここにおいてこそ、わたしたちはイエスさまを知り、イエスさまと出会い、十字架と復活の恵みをはっきりと知ることが出来るのです。

<イエスさまが真ん中に>

さて、二人の弟子が、目の前の方が復活なさったイエスさまだと分かったとたん、イエスさまのお姿は見えなくなりました。しかし、二人はもう目には見えなくても、イエスさまは確かに復活し、共にいて下さるお方であることを知りました。

二人の弟子はこの時、エルサレムから数時間かけてエマオの村近くまでやって来たところで、もう日も暮れていました。しかしまた、ここからすぐにエルサレムに引き返していきました。仲間たちに、イエスさまの復活のことを知らせるためです。

エルサレムに戻って仲間の所に戻ると、なんと、シモン・ペトロという弟子にも、復活のイエスさまが現れた、と言います。二人の弟子も、35 節にあったように「道で起こったことや、パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった次第を話し」ました。

十一人の弟子と、二人の弟子と、仲間の弟子たち、十人以上の弟子たちが集まって、復活のイエスさまとお会いした、という話を分かち合っていたのです。

さてここからが、今日語られることの話になります。36 節にはこうあります。「こういうことを話していると、イエス御自身が彼らの真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた」。

そして面白いことに、37～38 節にはこう続きます。「彼らは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った。そこで、イエスは言われた。『なぜ、うろたえているのか。どうして心に疑いを起こすのか』」。

…つい今しがたまで、皆で復活のイエスさまのことを話していたのではなかったのでしょうか。二人の弟子も、ペトロも、復活のイエスさまとお会いしたのではなかったのでしょうか。しかし、再び復活のイエスさまが、突然彼らの真ん中に立たれると、彼らは恐れおののき、うろたえ、心に疑いを起こした、というのです。

信じたと思ったら、疑ってしまう。分かったと思ったら、分からなくなってしまう。信仰の歩みの中で、当時の弟子たちも、そして今のわたしたちも、確信と疑いを、いつも行ったり来たりしています。十字架の救いや、復活を信じることの難しさ。わたしたちの不安定さ

と心許なさ。これは、当時の弟子たちの時代から今も、変わらないのかも知れません。

でも、この弟子たちの姿に、わたしは少し安心感を覚えます。それは、これだけ疑っても、これだけうろたえても、イエスさまが信じさせて下さる。イエスさまが、弟子たち、わたしたちの信仰を支え、守り、導いて下さるといふ、確かな証しに他ならないからです。

<体のよみがえり>

さて、恐れおののいた弟子たちは、復活のイエスさまのことを「亡霊を見ているのだと思った」とあります。つまりそれは、現れたイエスさまのことを、霊的な現象か何かだと思い、存在する「体がない」と思ったということです。

しかしイエスさまは、ご自分が、確かに体をもって復活したことを具体的に示されます。

ここで、とても大切なことは、「復活」というのは、霊的な現象や事柄ではなくて、「体のよみがえり」である、ということです。体のよみがえりを信じる。これは、非常に大切な信仰です。復活が、体のよみがえりである、ということは、神さまの力が、死を確かに打ち破った、ということだからです。

死によって、肉体は滅んでしまって、実体のない、霊だけ、魂だけになってしまいました、というのでは、死に勝利したとは言えません。

でもわたしたちは、この世における死の圧倒的な力を知っています。肉体が、死に滅ぼされ、朽ちて、失われてしまう現実を、この目で見て知っています。だから、死んだ者の「体のよみがえり」というのは、常識では当然あり得ないこと、起こるはずのないことなのです。

これが、「霊」の事柄、つまり、何か心の中の出来事であるとか、思想であるとか、思い出だとか、幻だとか、現象である、と理解するならば、起こり得ることとして、何とか受け止めることが出来るのかも知れません。

でもそれは、神さまの力を、わたしたちの理解の範囲に合わせて、小さくしてしまうことになります。そんな、わたしたちが理解できる範囲の力の神さまが。わたしたちの知識に収まる程度の力の神さまが。わたしたちをこの罪の現実から、死の現実から、はたして救うことがお出来になるでしょうか？

わたしたちは、神さまの御力が、ご計画が、救いの御業が、わたしたちの思いも、理解も、常識も、経験も、はるかに超えているものである、ということをお認めなければなりません。だから「復活」は、合理的に理解したり、納得することではなく、信じるべき事柄なのです。

そのように、わたしたちを支配している現実を超える、神の力、神の御心であるからこそ、神さまは、わたしたちが絶望するような現実から、立ち上がれないような嘆き悲しみから、救いようのない罪から、滅びの死の只中から、救って下さることがお出来になるのです。

神の力は、イエスさまの十字架の死と、復活に、最も現わされています。

わたしたち罪人を救うために、神の御子イエスさまが命を捨てて下さる、そこまでしてわ

たしたちを愛し抜いて下さる神の力です。そして、死に打ち勝つことができる神の力。

この神の力が、救いの御業を成し遂げられたイエスさまを、死者の中から、よみがえりの体をもって復活させられたのです。

だからわたしたちも、この神の力によるならば、罪から救われるし、やがて死を迎えても、終わりの日に、神の力によって確かに復活させられるのだと、信じる事が出来るのです。

<復活の体>

イエスさまは、「復活の体」を弟子たちに示して下さいました。39 節にはこうあります。「『わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしだ。触ってよく見なさい。亡霊には肉も骨もないが、あなたがたに見えるとおおり、わたしにはそれがある。』こう言って、イエスは手と足をお見せになった」。確かに体のよみがえりであることを、イエスさまは示されました。

弟子たちは、おそらくイエスさまの手と足に、あの十字架の釘の跡を見たに違いありません。あの十字架につけられたイエスさまが、今復活なさって、ここにおられる。

十字架のイエスさまと復活のイエスさまは、別人ではありません。十字架におかかりになったイエスさまが、復活なさって、体をもって、ここに確かに存在しておられるのです。

彼らは喜びを覚えました。が、まだ信じられず不思議に思っています。復活を信じるということがどれだけ困難なことか、それがよく分かります。

そんな彼らに、イエスさまはなんと、魚を食べるという仕方で、ご自分の体をお示しになりました。41 節以下にこうあります。「彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっているので、イエスは、『ここに何か食べ物があるか』と言われた。そこで、焼いた魚を一切れ差し出すと、イエスはそれを取って、彼らの前で食べられた」。

イエスさまは、手と足をお見せになることで、魚と一緒に召しあがることで、ご自分が確かに体をもって復活なさったことをお示しになりました。それは、弟子たちがこれまで幾度となく共に過ごす日々の中で見て来た、よく知った、イエスさまの食事のお姿だったに違いありません。あの、共に時を過ごしてきたイエスさまが、そして確かに十字架で死なれたイエスさまが、復活なさって、体をもって、今生きて、確かに、目の前におられるのです。

イエスさまはこう仰いました。「まさしくわたしだ」。これが、復活の出来事なのです。

さてしかし、ここで、わたしたちはやはり「復活の体」がどのようなものなのか、疑問を持つかも知れません。

復活のイエスさまの手足に傷が残っていたということは、わたしも復活の時に、今残っている体の傷や、不自由さが残るのでしょうか。イエスさまは、魚を食べられましたが、わたしたちは復活してからも、食事をしなければお腹が空くのでしょうか。でも、イエスさまは、エマオで二人の前から姿が見えなくなったり、エルサレムでは突然弟子たちの真ん中に現れたりなさいました。それはどういうことなのでしょうか。

はっきりいって、具体的に復活の体がどういうものか、わたしたちが理解して飲み込めるような形で説明はなされていません。

しかし、このルカによる福音書よりも以前に書かれた、コリントの信徒への手紙一 15 章では、今の体がどのような体に復活するのかを、このように語っています。

朽ちるものでも、朽ちないものに復活し、卑しいものでも、輝かしいものに復活し、弱いものでも、力強いものに復活する。

朽ちないもの、輝かしいもの、力強いもの。そのような、復活の体を与えられます。朽ちないのですから、もうその体が死ぬことはないのでしょう。輝かしいのですから、誰しものが喜ぶことの出来る体なのでしょう。力強いのですから、衰えたり弱ったりしないのでしょう。

そういう復活の体であるならば、わたしたちは、たとえ今、体に傷があっても、見た目のコンプレックスがあっても、年老いた体であっても、復活の時にそれがどうなるか、ということに心配する必要はありません。わたしたちの思いを超えた、神さまの栄光に満ちた、神さまと共に生きるための体。そのような復活の体を与えられることは、間違いないからです。

わたしたちの復活の体は、この世の終わりの日に与えられるものです。その日は、天に上げられた復活のイエスさまが再び来られる日であり、わたしたちの救いの完成の日です。

わたしたちの復活は、終わりの日に、神さまが完成させてくださり、神さまが与えて下さるものなのです。

今は欠けだらけで体も、心も、信仰も、何もかも未完成のわたしたちです。体は弱ったり、痛んだりするし、心は傲慢になったり、またすぐに傷ついたりもし、隣人と共に生きることも困難で、神さまの御心に適った歩みが出来ない、破れかぶれのわたしたちです。

でも、わたしたちは、イエスさまの十字架の死によって罪を赦され、すでに今のこの時から、神さまの子どもとして、救われた者として、歩み始めることがゆるされています。

そして終わりの日に、わたしたちは、今ここにいる、この「まさしくわたし」が復活し、死に打ち勝たれたイエスさまによって、神の力によって、よみがえりの体を与えられ、神さまの御前で、すべての破れが恵みで覆われて、悔い改めと、感謝と、喜びとをもって立つことになるに違いありません。

ですから、このわたしは、復活して別人になるのではありません。また、自分というものが無くなって、何か大きなものの一部になるようなことでもありません。

この、まさにわたしが。神さまに命を与えられ、存在させられ、名を呼ばれ、信仰を与えられ、愛されて今ここに生きている、このわたしが。終わりの日に完成させられ、復活させられ、イエスさまと顔と顔を合わせて会い見える、ということなのです。神さまに名前を呼ばれ、「はい、わたしはここにおります」と、完成された神の御国で、このわたしがお応えするということなのです。

そしてわたしたちは互いにも、復活の体をもって、イエスさまの御前で、再び会い見ることが出来るでしょう。

この恵みの約束を、十字架の死から復活なされたイエスさまが、復活のご自分の体をもって、確かな希望として、弟子たちに、わたしたちに、示して下さいました。

<あなたがたに平和があるように>

さて、ルカによる福音書では、復活のイエスさまの食事の場面が、エマオの二人の時と、今日の十数人の弟子たちの前での2回、立て続けに出て来ました。

イエスさまを主人として、弟子たちが食卓を囲み、食べ飲みする食事の席。それは、弟子たちがイエスさまに名前を呼ばれ、従ってからこれまで数年間、イエスさまが十字架につけられる前日まで、毎日、幾度となく繰り返されて来た日常の生活の場面でした。

そしてまた、復活のイエスさまは、食事という、この日々の生活の中心となる場に、生きる営みの只中に、現れて下さいました。

それは、復活のイエスさまがこれからも、わたしたちの具体的な日々の歩みの中に、生活の只中に、いつも共にいて下さるといことです。

復活なされたイエスさまは、今は天に上げられて、わたしたちもこの目でそのお姿を見ることは出来なくなりました。

しかし、今も聖霊によって、体を持った、確かに生きておられる復活のイエスさまは、ここに、わたしたちの真ん中に立ち、具体的な日々の中であって、生活の只中にあって、共にいて下さるのです。

復活のイエスさまは「あなたがたに平和があるように」と言われました。

平和。それは、単に人間同士の争いがないことや、穏やかな生活のことではありません。

本当の平和とは、神さまの愛を知っていること。神さまの救いに与っていること。神さまが共にいて下さること。それが、わたしたちの、本当の「平和」です。

ご自分の命を差し出してでも、わたしを愛し、わたしを救って下さるお方が、いつも共にいて下さり、生きて働いて下さる。わたしが生きる人生の中に。日々の生活の中に。目覚める時も、食事をする時も、喜んでいる時も、悲しんでいる時も、誰かと過ごす時も、一人でいる時も、眠る時も。このわたしと一緒に、復活のイエスさまが共に歩いて下さっている。人生の荒波にもまれている時でも、悲しみや苦難の中にある時にも、イエスさまがわたしたちの拠り所、わたしたちの逃げ場、わたしたちの砦となって下さる。

神さまが、わたしたちと共にいて下さる。ここに平和があります。

イエスさまは、ご自分が、そうしてわたしたちと共にいて下さるその恵みの現実において、「あなたがたに平和があるように」と言って下さるのです。わたしが共にいるのだから、あなたがたは平和に歩むことが出来る。そう、宣言して下さいます。

苦しみ悩みの時も、わたしがあなたを支えている。あなたが死ぬ時も、わたしはあなたを捕らえている。この世の終わりの日も、わたしがあなたに復活を与え、あなたの救いを完成させる。だから、わたしに依り頼みなさい。このわたしのもとにいなさい。わたしはあなたがたに平和を与えた。この平和のうちに行きなさい。わたしはあなたがたと共にいる。

復活のイエスさまは、わたしたちの真ん中で、そのように告げて下さるのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

イエスさまがわたしたちの救いのために成し遂げて下さった十字架の死と、またわたしたちの終わりの日の、救いの完成の約束、復活の約束として、イエスさまが死者の中から、復活の体をもってよみがえって下さったことを感謝いたします。

わたしたちの常識や、知識や、経験を超えた出来事です。しかし、そのようなわたしたちの思いを遥かに超える神さまの力、神さまの愛だからこそ、わたしたちは罪から救われ、死に打ち勝つ復活の恵みを与えられ、神さまと共に生きる者とされました。

なお、疑い深く、うろたえたり、恐れたりするわたしたちですが、復活し、生きておられるイエスさまが、わたしたちの小さな日々の歩みの只中に、いつも共にいて下さることを信じる者とならせて下さい。

復活のイエスさまと歩む日々の生活の中で、神さまの愛と、救いの恵みと、復活の希望を、ますます確かにされ、「平和があるように」と告げられた御言葉が真実であることを知る者とならせて下さい。

イエスさまの御名によって祈ります。アーメン